

塘研究室現地調査報告

今年度、私たちの研究室では、pHが約3と強い酸性を示す裏磐梯地域の銅沼における食物網解析（消化管内容物の観察と安定同位体比の解析）を、4年生の佐々木信彰君の卒業研究として進める予定です。銅沼は磐梯山の登山道沿い標高約1100mの場所にある赤褐色の沼で、強い酸性水にも関わらず、8種の水生昆虫の生息を確認しています（水生昆虫以外の底生動物は生息していません）。最も優占しているのがチャイロシマチビゲンゴロウという小型のゲンゴロウの仲間で、その他にもゲンゴロウの仲間、トンボの仲間、アメンボの仲間などが分布しています。これまでに銅沼から記録されているすべての水生昆虫が捕食者（二次以上の消費者）ですが、何が何を食べているのか、そして、何によって食べられているのかを明らかにしたいと考えています。

銅沼は磐梯朝日国立公園の特別保護地区内にあるため、現在環境省による動物の捕獲許可を待っているところです。そこで、同じくチャイロシマチビゲンゴロウが優占する河川における食物網解析を進めるため、4月26日に酸性河川である酸川（猪苗代町名家付近、標高約560m）での底生動物サンプリングを佐々木君と塘が実施しました（サンプリングは昨年12月に続き2回目）。酸川の調査地ではチャイロシマチビゲンゴロウの他、コオノオナシカワゲラ、レゼイナガレトビケラ、モンキマメゲンゴロウが優占することが明らかになっています。

融雪による水量の若干の増加はありましたが、水温もそれほど低くなく、水流も思ったほどではありませんでした。午後から雨の予報でしたので、酸川の調査地で採集できる主な底生動物を早急に確保しました。冬季はフクシマクロカワゲラが多いのですが、すでに成虫の発生時期は終了したようで、河川内に幼虫は見られませんでした。その代わりに、ホソカワゲラの仲間が多く、川岸付近には成虫もたくさん見られました。一次消費者（リターを食べると思われるものも含む）の餌資源となりそうなものも採取し、帰路につきました。

